

首里城復元における伝統技術の 継承・人材育成の取組

内閣府 沖縄総合事務局 国営沖縄記念公園事務所 工務課長

しまぎ あつし
島崎 敦

1. はじめに

国営沖縄記念公園首里城地区では，平成元年より復元工事（以下，「平成の復元」という）が始まり，平成31年に東の^{あがり}アザナ等の区域の完成をもって全てのエリアが開園しました（写真－1）。しかし，令和元年10月31日の未明に起きた火災により，正殿をはじめ7施設が全焼，2施設が一部焼失しました（写真－2）。

国営沖縄記念公園事務所（以下，「当事務所」という）では，地元関係者や関係機関，有識者の方々とともに，県内外からさまざまな形での支援をいただきつつ，首里城の再度の復元（以下，「令和の復元」という）に取り組んでいます。

一部焼失の2施設については，令和3年3月までに仮復旧が完了しました。全焼した施設については現在，正殿の復元を進めており，令和7年7月には外観がおおむね完成しました（写真－3）。引き続き，正殿内部の塗装や南北の建物につながる両廊下の整備等を行い，今年の秋に正殿全体の完成を予定しています。

令和の復元には，防火対策の強化や琉球王国時代の首里城に関する新しい知見の活用，材料調達といったさまざまな課題があり，沖縄総合事務局が設置した「首里城復元に向けた技術検討委員会」



写真－1 平成の復元時の首里城



写真－2 令和元年の火災後の様子



写真－3 外観がおおむね完成した正殿

（以下，「技術検討委員会」という）において対応を検討しています。

首里城は琉球王国時代の建築物であり，可能な限り当時の技術を用いて復元されることから，復

元時はもちろんのこと，復元後に施設を維持管理・補修する際も伝統技術が活用されます。そこで重要となるのが，伝統技術を未来にわたって継承していくこと，新たな人材を育成していくことです。本稿では，当事務所と関係機関が協力して実施している，伝統技術の継承・人材育成の取組について紹介します。

2. 伝統技術の継承・人材育成に関する課題と検討体制

首里城の正殿は，日本本土や中国の建築の影響を受けつつも，随所に琉球建築の手法を取り入れ，さらに独特の形態を創出した極めて独自性の高い建物です。また，北殿，南殿等の正殿以外の施設にもさまざまな伝統技術が使われており，具体的には，塗装，彩色，建造物木工，木彫刻・石彫刻，赤瓦（製作・施工），染織（刺繍），焼物，石積みが挙げられます（写真－4）。

この多様な伝統技術は，平成の復元の際にも用いられていましたが，令和の復元にあたっては，次世代を担う人材が少ないことから，技術検討委員会において，北殿・南殿等の復元やその後の首里城全体の維持管理・修復を見据えた人材育成の重要性が指摘されました。また，令和3年3月に沖縄県（以下，「県」という）が策定した「首里城復興基本計画」においては，「琉球王国時代から脈々と受け継がれる建築や美術工芸に関する伝統技術を復元のみならず，修復にも活用していくことで，技術の継承及び人材を育成する」ことが基本

施策の一つとして位置付けられるなど，伝統技術の継承・人材育成を行っていくことが必要とされる状況でした。

この課題に対応するため，当事務所と県，伝統技術の研究機関である一般財団法人沖縄美ら島財団（以下，「美ら島財団」という），研究機関・教育機関である沖縄県立芸術大学（以下，「県立芸大」という）の4者（以下，「4者」という）で，令和4年11月22日に「首里城復元における技術継承・人材育成に係る連携協定」を締結し，持続可能なかたちで復元，維持管理・修復の技術を有する人材の育成を進めていくために協力していくことを確認しました。さらに，同協定を踏まえ，令和5年3月に「首里城復元における技術継承・人材育成－全体方針－」（以下，「全体方針」という）を4者で策定しました。

この中では，正殿復元完了まで（短期），首里城全体復元完了まで（中期），全体復元後（長期）に分けて達成目標を設定したほか，対象とする技術分野，取組の進め方，実際に取り組んでいく体制等について決めました。

3. 伝統技術の継承・人材育成に関するこれまでの取組

伝統技術の継承・人材育成のために，これまで4者で行ってきた実際の取組について，一部の事例を紹介します。

(1) 取組の方向性

全体方針を踏まえ，4者の実務代表者が集まる会議において，首里城の復元中のみならず，さらにその後も見据えてどのような取組を行っていくのか，方向性を検討しました。

検討の前提として，首里城復元に用いられる技術は沖縄特有の技術も多く，地理的に他県との移動も容易ではないこと等から，職人



写真－4 首里城で用いられている主な伝統技術

の活躍の場は県内を中心に創出する必要があること、また、新たな担い手を増やすために、伝統技術に関わりがない方にも首里城公園等で行われる活動に参画してもらいながら、伝統技術に接する機会を増やし、興味を抱けるような取組を通じて伝統技術の価値や重要性を社会一般に広げていくことが重要であると確認しました。

これらを踏まえて、「技術の維持・研鑽・継承等の取組」と「体験，広報，機運醸成の取組」を組み合わせることが持続可能な職人の育成，確保につながるとして、6つの項目を今後の取組の方向性として整理しました（表－1）。

表－1 伝統技術の継承・人材育成のための取組の方向性

1. OJT、OFF-JTの受入れ先の継続的な確保
例) 工事受注者等に対する若手職人の雇用促進
2. 見学や体験等の機会の継続的な確保
例) 今後の首里城復元工事・修復工事での見学会の実施
3. 技術者・職人の安定した雇用の確保
例) 地域全体での復元建造物修復の実施時期の平準化
4. 伝統技術の市場の拡大
例) 伝統技術を活用した商品の開発・PR
5. 次世代への技術継承
例) 伝統技術に関する教育機会の提供
6. 人材の裾野の拡大
例) 伝統技術についての情報発信

(2) 正殿復元工事と連携した伝統技術の継承の取組

正殿復元工事が進む中で、表－1の「1. OJT、OFF-JTの受入れ先の継続的な確保」に関する取組として、実際の現場で熟練の職人からの教えて技術を磨くOJT、専門家からの講義等を通じて技術を学ぶOFF-JT等を実施しています。個々の伝統技術ごとにさまざまな取組を実施していますが、本稿では塗装彩色分野を事例として紹介します。

① 沖縄県工芸振興センターにおける漆芸研修

沖縄の伝統技術に関する研修を実施している沖縄県工芸振興センターにおいて、県内で漆芸の職に従事しようとする方を対象に、研修期間1年の講義・実技指導を含む研修を実施しています。

研修の内容は、講義（工芸概論・機械・工芸とデザイン・伝統文様）、実技（髹漆技術・乾漆技術・加飾技術）、実習（原材料調査、工房訪問、展示



写真－5 正殿の壁面と同じ塗装工程の実技研修

会の企画）からなり、令和6年度からは正殿の壁面と同じ塗装工程も実技として実施しています（写真－5）。

② 美ら島財団による沖縄の建造物保存に関する技術伝承者養成事業

美ら島財団では、漆塗の専門家等を講師とし、講義と実習を通じて職人を志す方を、技術の伝承者として育成しています。研修生は沖縄県工芸振興センター修了生や県立芸大卒業生であり、具体的には首里城を想定した漆塗りや彩色、実際の工事現場の見学等を実施しています（写真－6）。



写真－6 彩色実習

研修生の多くが研修終了後に首里城の復元に携わりたいという意向を持っており、実際に現在行われている正殿の復元で活躍している修了生もいます。

③ 漆塗替え作業を通じた指導（OJT）による職人の育成

当事務所が属する沖縄総合事務局や関係機関が連携し、県立芸大の卒業生や沖縄県工芸振興センターの修了生等、琉球漆塗りの今後を担っていくことを志す若手職人へのOJTとして、首里城公園内の広福門の漆塗替え作業において、熟練技術者



写真-7 熟練技術者による指導

から技術指導を行いました(写真-7)。技術の習得度に応じて正殿の復元工事にも携わってもらっています。

(3) 学生向けの見学会の実施

表-1の「2. 見学や体験等の機会の継続的な確保」や「5. 次世代への技術継承」に関する取組として、高校生や大学生に伝統技術について広く知ってもらい、興味を持ってもらうための取組を実施しています。例えば、県立芸大の学生を対象にした取組では、当事務所が属する沖縄総合事務局や関連機関が連携し、学生を首里城の復元工事現場に招き、現場見学(写真-8)や若手技術者との意見交換、作業体験の機会を提供しています。

これまでの参加者43人に対するアンケートの結果、3割以上が、卒業後すぐに首里城の復元に携わりたいと回答しました。



写真-8 大学生向けの現場見学会

(4) 若手職人へのインタビュー記事の公開

表-1の「6. 人材の裾野の拡大」に関する取組として、伝統技術や建設業への関心を高めるために、復元工事に従事している若手の職人に焦点を当てたインタビュー記事を首里城公園ホームペ



図-1 ホームページでのインタビュー記事の公開

ージにおいて公開しています(図-1)。作業内容だけでなく、職人を目指した理由ややりがいなど、若手職人一人一人の目線に立った記事とすることで、若い世代の関心を高めるよう工夫しています。

4. 今後に向けて

以上のとおり、現在は主に正殿復元工事と関連した短期的な伝統技術の継承・人材育成の取組を実施しており、正殿の復元後は、北殿・南殿等、首里城全体の復元完了まで中期的な取組に移行していきます。全体復元後の維持管理・補修の段階を見据えると、例えば外壁塗装の塗り直しは数年に1回程度となることが想定されるなど、伝統技術を身に付けた職人の活躍の場を、必ずしも首里城のみで継続的に設けられるわけではありません。

長期的な視点で見ると、現時点では取り組めていない、表-1の「3. 技術者・職人の安定した雇用の確保」、「4. 伝統技術の市場の拡大」が重要になると考えています。これらの内容は、都市公園分野や伝統技術分野の関係者だけの取組は難しく、「3. 技術者・職人の安定した雇用の確保」については文化財分野と、「4. 伝統技術の市場の拡大」については、観光分野や商工分野と連携して取り組んでいく必要があります。沖縄のシンボルである首里城を末永く維持管理していくため、また、沖縄の伝統技術を将来に伝えていくために、今後も着実に取組を進めていきたいと思っています。